

〔類聚名義抄〕ハ蝕時力切音食日月蝕也ク

〔和爾雅〕天文日蝕ニツシヨク日食

〔和漢三才圖會〕天日蝕和名朔二日三日日月虧曰蝕稍小侵虧

日天高月天低而常異其行道至每朔則日月同經緯而相值則月在下而隔掩日光故日失光相離則

復元日蝕入陰曆則初虧西北甚於正北復於東北入陽曆則初虧西南甚正南復於東南如日蝕陰侵

象或大水如日蝕見星有弒君天下分裂

〔倭訓栞〕前編二十四はる 日本紀に蝕字を訓せり日月の蝕は虫の木葉を食ふごとくなれば食

餌の義なるべし俗にゑばみといふがごとし日蝕月蝕に禁裏御坐の間を包みまゐらす事御

湯殿の記に見えたり舶來の品に兩蝕儀あり

〔比古婆衣〕二月日の蝕をはえといふ由 近き頃となりて古事しのおともがら日月の蝕といふ

ことになれるを古はハエといへりと心えて文などにもすめりされど和名抄にも蝕字の下

に和名を載られず其外古き書どもの訓にもをさく見あたらすたゞ書紀の古訓に推古三十

六年三月丁未朔戊申日有蝕盡之とある蝕盡をハエツキタルコトと訓み舒明八年正月壬辰朔

日蝕之とある蝕をハエタリと訓み次に九年三月乙酉朔丙戌日蝕皇極二年五月乙丑十六月有

蝕之とある蝕をもハエタルコトとよみ又天武九年十一月壬申朔日蝕之とみえたるところに

はハエタリと訓り是ぞ其ハエといへる言の書に見えたる始なるべきさて其蝕をハエと云へ

るは日月の光映の翳るをを思て反さまに映と云なしたるにて死を奈保留病を夜須美葦を興

志など云ふと同じ例なるべし但し映の意ならむには假字ハエなるべきを此に擧たる推古紀

などにハエと作るかたは誤寫にて天武紀にハエと書事ぞよろしかるべきは古の私紀どもに